あとがき

日本には町や村単位で最低一社の神社があり、四季折々に祭礼が行われる。そして、人々はこぞって参拝に出かけ、練り歩くミコシの喧噪（けんそう）に酔いしれる。それが日本人としての一般的な姿であることは、誰しも認めるところであろう。ところが、そうして神社で神に向かって柏手（かしわで）を打ち、祈りごとをしている日本人の大半が、神道を宗教とは考えていないという不思議な現実がある。

そしてまた神と人との間にあって、神の意志を人間に取り次ぐための、神主としての本来の勤めを果たす資格のある神職が、ほとんどいないというお粗末な現実もある。「正神（まさがみ）に不思議なし」と、自らの怠慢を正当化する詭弁（きべん）を吐いてすましている神職に、大衆が宗教的な要素を見失ってしまうのも、当然の結果であろうか。それでもなおかつ日本人は、無意識の領域で神との接触を絶やすことなく、科学万能の今日まで神社に通い続けている。宗教意識に淡泊な彼らの心の奥に隠されているものは、いったい何なのであろうか？

神社に勤める神職が、祭礼のための祈祷、儀式の故事のみを綿々と守りぬくのみで、神との直接交渉を求める努力をしなくなったことの裏には、それ相当の理由があるはずである。外来宗教である仏教の僧侶の方が、まだ同じ宗教でも、神

仏との接触を求めて修行を積んでいる。しかし同じ日本人でありながら、神職のみが怠け者であるとは考えにくい。それではなぜ神職は、神との直接交渉を避けようとするのであろうか？

この問の陰には、神道という宗教のみではなく、日本国家の根幹にふれる問題が、実は隠されているのである。つまり、神主が祭神との直接交渉を果たしたとき、白山日本がアマテラスによってつぶされ、支配されたという真実が現れ出てしまうことになる。その真実が現れるとき、その神社が反体制側であれば、その神社は天皇族によって取り壊され、神主は抹殺される運命にあったのである。祭神不明の神社が今も各地に残され、アマテラス系統の祭神の陰に、つぶされた主祭神がひそかに隠し祭られている神社も多い。生き残っていくためには、口をつぐんで耐え忍ぶ以外に方法がなかったのである。

それでも日本の場合は、恵まれていると言えるかもしれない。つぶされた側のスサノヲやオオクニヌシなど国津神系統の神社も、白山神社も、堂々と残されてはきたのだから。それに比べて外国では、インドや中国以外は、支配宗教のキリスト教とイスラム教に、土地の神々も民族の神々も、ほとんど封じ込められてしまっている。ただユダヤ教のみが、一神教を隠れ蓑（みの）にし、魔王教として迫害されながらも、抵抗し続けてきたと言えよう。新しい時代は、これら封じ込められた

神々を解放して、神と人との間に正しい交渉を回復させるところから生れてくる。宗教音痴の日本人に、奮起を促さなければならない理由がここにある。

中略

神を軽んじるというのではない。神なくして地球も人間も存続できないことは言うまでもないことで、それを無視することは、求道者としての資質に欠けていると非難されても仕方がない。しかし、地球はあくまでも人間が主体として生存するために用意された惑星である、と光道は考えている。人類が人として踏むべき道を見失っているとはいえ、主体である人間を無視して事が運ばれてはならないのである。人間を介して展開する神界劇の意味がそこにある。